

# 学位論文要旨

学位論文題目 言語聴覚士養成教育における学習目標・評価に関する実践的研究  
—ICEアプローチを活用して—

申請者氏名 松尾 朗

本研究は、学習者が主体的に自らの学びを省察することを誘発するために、言語聴覚士養成教育に求められる学習目標・評価の方法を ICE アプローチに基づいて開発し、その有用性と課題について実践的に検証することを目的としている。ICE アプローチとは、ウィルソン (Robert J. Wilson) によって 1996 年に提唱され、2000 年にヤング (Sue Fostaty Young) とウィルソンによって発展させられた学習過程や目標を示した理論である。

第 1 章では ICE アプローチを裏付ける理論を検討しながら、それらとの相違点を考察することで、ICE アプローチの持つ特性を明らかにした。ICE アプローチとは学習者の学びの過程を 3 つのフェーズで簡潔に示したものであり、学習者の学びに対する姿勢や学習過程を教員のみならず学習者も認識することを可能とする理論である。ブルームの目標分類学、マルザーノの分類、SOLO 分類学といった理論と ICE アプローチを比較することで、ICE アプローチを教員側の一方的な視点ではなく学習者の自己評価を促し学習者を評価主体とするための理論として位置づけた。さらに先行研究をレビューし、一般教育とは学習評価やコースデザインにおいて ICE アプローチの活用と意図する点、看護師養成教育とは学外での実習前の学内の授業という点で本研究の検討対象との相違を明らかにした。そのため、本研究では学習評価を中心としながらも、授業目標から授業の設計という一連のコースデザインに ICE アプローチを援用し、授業実践を通して学習者の学びの変容を分析し、ICE アプローチの持つ有効性と課題を実証的に分析することとした。また、学内の授業を研究対象とし、臨床現場に出る前にいかに主体的な学びの視点を形成できるかという点においても本研究の特色を示した。

第 2 章では、高等教育段階における学習評価の現状と課題について明らかにし、ICE アプローチに基づく学習評価の有用性について論じた。評価の目的と評価の時期を示した総括的評価と形成的評価を前提として踏まえ、直接的評価と間接的評価、量的評価と質的評価という評価軸を中心に 4 つのタイプに学習評価を分類し検討することを通して、ICE アプローチに基づく学習評価は、タイプ I と IV の学習評価に関連が深いことを示した。評価の在り方も、総括的で量的な評価ばかりではなく、学習者の学びの過程を対象としたり、学習者の自己評価を促すものが求められつつあり、言語聴覚士養成教育においては、その重要性はより大きなものとなる。また、パフォーマンス評価においてはルーブリックが用いられるが、学習の結果を重視した量的な記載内容が多いことや評価者が授業者に限られがちであるといった点において課題がある。それに対して、ICE ルーブリックでは、学習者の学習過程を授業者と学習者の双方向から認識しやすく、学習者自身が次の学習過程を目指すためにはどのような行動・支援をすればいいのかを考えることを促すことができることを指摘した。

第3章では、ICEアプローチに基づき授業実践を設計するための理論的な枠組みについて論じた。授業設計には、ICEアプローチとの親和性が高い「逆向き設計」を採用し、ICEアプローチを授業デザインに実装するための基本的な枠組みを提供するものである。ICEアプローチの視点から、実践研究における到達目標を設定するとともに、学習過程にも目を向けた質的な学習評価の方法としてICEルーブリックの可能性を論じた。

第4章では、第1章から第3章までの理論的検討を通して、本研究の実践的な枠組みを設定し実践研究1を行った。授業全体の変化として、その場の知識の習得（Iレベル）の学習ではなく先を見据えた学習（Eレベル）への移行が示されるようになったことが挙げられる。Iレベルの学びの位置から、Cレベルの学びの過程への変容がみられた。また、利己的な目的での知識の習得の部分は残りながらも、誰か（支援者）のために学びを活用していくといったような自己から支援対象へと意識を向けた学びへの変化も見いだされた。このように一定の効果は得られたと考えられる一方で、実践の条件面などについての課題も残された。

第5章では、第4章の実践研究1の有効性ならびに課題をふまえ、授業を再構築し実践研究2を3例行った。その結果として、学習者はIレベルの学びに留まることなく、CレベルやEレベルを意識しながら、その基盤としてIレベルやCレベルの重要性を認識するといった自己の学びに関する認識の変化が見られた。これはICEアプローチの特徴であり、学習者自身が学びの位置を明確にすることで、学習者は次にどのように学びを進めるのかという学びの見通しや手立てを得られるとともに、授業者は学習者の学びに対してどのような支援や授業を展開していけばいいのかを考える手立てにもなることが示された。

終章では本研究において学びの変容をもたらした要因として、授業内容の関連図を用いた説明、関連図を示しながら各単元の学びに合わせた発問の提示、ICEルーブリックの自己評価のみならず、教員も同じ評価ツールを使用しコメントを追加して返却したことの3つを挙げた。このような働きかけにより、授業の関連性や見通しを意識するだけでなく、自己評価も併せてICEによる学びの位置を認識することで、学習者が次の学びに進めるための手立てが明確にフィードバックされることで、学びについて自己を変容させることとなったと考える。ICEアプローチの理論を活用することにより、学習者の学びの変容を得ることができたという点において一定の効果はあったと推察される。しかし、ICEルーブリックによる自己評価における授業者と学習者のズレやルーブリックという枠組みに当てはめることを意識するあまり学習者の自己評価を誘導的な選択で狭めてしまっていることが課題として残された。このような課題は、授業者が学習者との認識の違いに気づいたり、学習者側からの学びの視点を認識する契機ともなり、ICEルーブリックを通じて顕在化する授業者と学習者のズレは、克服すべき課題というだけでなく、本研究の隠れた肯定的な成果の1つとしても捉えられる。

以上のことからどの授業実践も半期という期間もしくは科目単独で学習者が主体的に自らの学びを省察することを十分に誘発できたとは言いきれない。また、本研究では学内での授業が検証の中心であり、学内での学びが臨床実習や卒業後の臨床現場でどのように活かされているのか臨床場面で追跡調査を十分行うことができていない。したがって、卒業後も含めた言語聴覚士養成教育全体の枠組みに長期的な視野で取り入れていくことなどが課題であるとともに、言語聴覚士養成教育を発展させていく一助となると考える。

## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第162号	氏 名	松尾 朗
論文題目	言語聴覚士養成教育における学習目標・評価に関する実践的研究 —ICEアプローチを活用して—		
<b>(論文審査概要)</b>			
<p>本論文は、学習者の「主体的な学び」を誘発するために、言語聴覚士養成教育に求められる学習目標・評価の方法を開発し、その有用性と課題について実践的に検証することを目的としている。そのために、ICEアプローチと呼ばれる学習理論を取りあげ、ICEアプローチに基づくルーブリックを用いた学習評価を開発・検証している。</p> <p>第一章では、ICEアプローチの基盤となった他の学習理論を検討しながら、それらとの異同を分析することで、ICEアプローチの持つ特性を「学習者自身が自身の学びを認識することを可能にする」という点に見出している。第二章では、高等教育における学習評価の現状と課題について論じた上で、ICEアプローチに基づくルーブリックがその課題を克服する上で持つ可能性が論じられている。第三章では、ICEアプローチに基づいて授業実践を開発し、授業設計を行うための理論的な枠組みが論じられている。第四章および第五章では、上記の理論的検討をふまえて、実際に行われた実践研究の概要と結果が論じられており、パフォーマンス課題に対する学生の記載内容等をSCATと呼ばれる分析手法を用いて考察している。以上をふまえて、終章においては、ICEアプローチに基づく授業実践および学習評価が、学習者に自己の学びを認識するように促し、知識を習得することそれ自体を目的とするのではなく、既習事項と新しく学んだ事項とのつながりを意識したり、入職後の知識の活用を意識した学びを生み出していることを示した。</p>			
1. 創造性			
<p>ICEアプローチに関する実践研究はすでに先行するものがいくつか存在するが、本研究は①ICEアプローチに基づく教育実践による学生の変化が実証的に検討されていること、②医療系専門職教育におけるICEアプローチの実践研究は演習や実習科目に限定されていたのに対し、講義科目へのICEアプローチの応用可能性を示したこと、③ICEルーブリックを用いることで学習者の自己評価におけるICEアプローチの意義を示したこと、といった点において先行研究とは異なる知見を示しており、このことから創造性においては「優れている」と評価できる。</p>			
2. 論理性			
<p>本論文は、理論的枠組みの検討から授業デザイン、そして実践研究へと一貫した流れで構成されている一方で、理論面での記述と実際の実践内容との関係について説明しきれていない部分もあり、論理性については「達成できている」と評価した。</p>			
3. 厳格性			
<p>先行研究については、関連するものを取り上げて検討することを通して研究の独自性を示すことができている。実践研究のデザインや分析方法については、予備審査での指摘を受けて修正されているが、調査の手続き的などより詳細な記載が求められる部分もある。以上のことから、厳格性については「達成できている」と評価した。</p>			
4. 発展性			
<p>これまでの研究においては対象とされなかった領域においてICEアプローチを適用した点に本研究の独自性があるが、本研究で対象とした一つの授業のコースデザインや学習評価だけでなく、今後は、例えば医療系専門職養成教育の4年間のカリキュラム編成をICEアプローチで構想したり、養成校—学習者—実習施設で評価基準を共有するためのツールとしてICEルーブリックを活用する研究なども</p>			

予期される。看護教育などに比べてこれまで注目されてこなかった言語聴覚士養成教育をフィールドとした教育研究のあり方を示している点において、発展性については「優れている」と評価できる。

論文審査結果

合・否

審査委員 主査 (氏名) 熊井 将太

(氏名) 松岡 勝彦

(氏名) 鷹岡 亮

(氏名) 石井 由理

(氏名) \_\_\_\_\_